

大豆生育期の広葉雑草に対する除草剤利用のポイント

【1 広葉雑草を対象とする除草剤の特徴】

大豆の雑草防除は土壌処理剤の散布と中耕・培土の組合せが基本ですが、条件により生育期の広葉雑草の追加対策が必要となることから、主な茎葉処理剤等について特徴を示します。

(1) ベンタゾン液剤（商品名：大豆バサグラン液剤）

土壌処理を行わず単用すると、大豆3~4葉期（播種後約1カ月・雑草草丈15cm以下）という早い時期の処理でも、シロザ・イヌビユ・エノキグサといった草種が残る場合があります。薬害の品種間差にも注意を要しますが、下記薬剤と異なり作物の上から散布できるのが利点です。

(2) 非選択性除草剤の畦間処理

グルホシネート液剤（商品名：バスタ液剤）、ピアラホス液剤（同：ハービー液剤）、グリホサートカリウム塩液剤（同：ラウンドアップマックスロード）等は、幅広い草種・時期での効果が見込めます。ただし、畦間処理は専用の器具が必要で、株間の雑草が残ることがあります。

(3) ロロックスの畦間・株間処理

ベンタゾン液剤より一定程度効果が高く、株間の雑草にも対応できます。非選択性除草剤と比べてシロザ（その他にも未確認の草種あり）が残る点は不利ですが、雑草茎葉兼土壌処理なので後発生に対する抑制効果も見込まれます。畦間処理と同じく専用の器具は必要です。

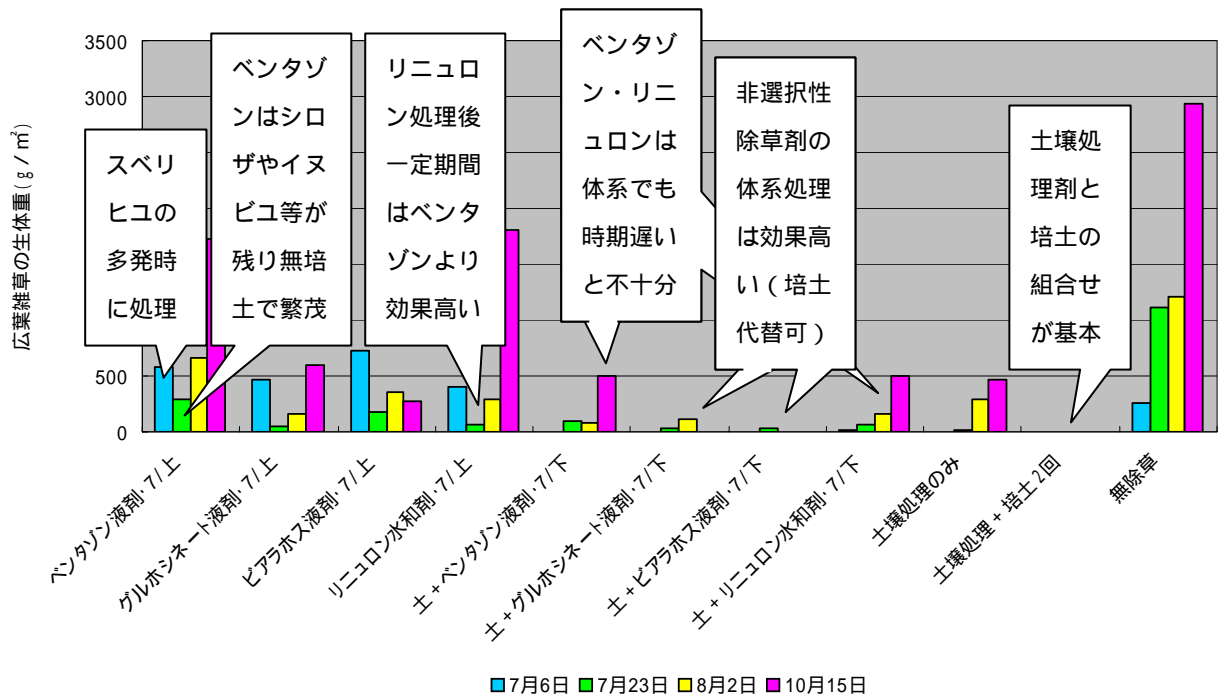


図 大豆生育期の広葉雑草対象剤による雑草発生量の推移（平成19年・農業研究センター）

注）播種期は6月5日。凡例は「土壌処理の有無（有りを土と表記）+ 薬剤の種類・処理時期（月/旬）を示す。7月上旬は7月6日・大豆3~4葉期、7月下旬は同23日・同7~8葉期に処理。薬量は基準上限、希釈水量は100L/10a。

【2 農薬の使用に当たっては】

ラベルの表示事項を必ず確認のうえ、使用基準を遵守し、使用者が責任を持って使用してください。不明な点は関係機関のお問い合わせのうえ、誤使用がないよう徹底してください。